

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2016-07-01

APM news 153

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館 (旧北越銀行宮内支店)

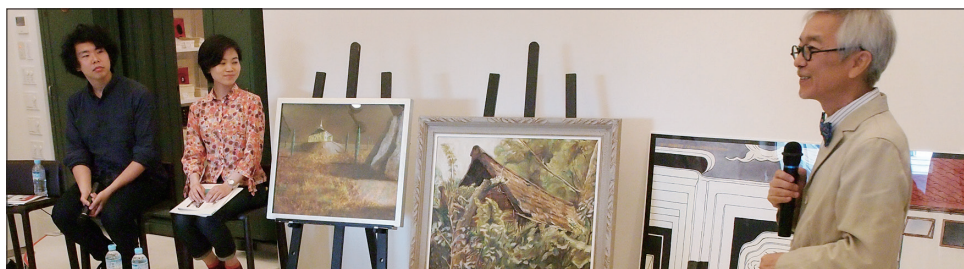
第33回美術館大学

「創作者における宮内・撰田屋百景の魅力について」

5月28日(土)pm3:00~pm4:30 / 受講者: 66名 / 講師: 秋山孝、堀池真美、大町駿介



〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233



5月28日(土)に開催された第33回美術館大学は、「創作者における宮内・撰田屋百景の魅力について」をテーマに掲げ、宮内・撰田屋地域の魅力を創作者の立場から講演した。講師はAPM館長・秋山孝(多摩美術大学・教授)、堀池真美助手(多摩美術大学)、大町駿介助手(多摩美術大学)の3名が務めた。

導入として秋山館長が美術館大学の7年間の足跡をたどり、今回の美術館大学に一般の参加者だけでなく、学生の姿が多く見られることに感慨を示した。物事には多様性が重要であり、一般と学生、多摩美術大学と長岡造形大学、日本人と外国人といったさまざまな価値観、環境の人々が同じ時間を共有するための場所としてAPMを提供したいと語った。

次に、秋山館長、大町助手が建物を題材に作品を描き続けた画家について紹介した。秋山館長は向井潤吉を例に挙げた。古い民家を描き、「民家の向井」と呼ばれた。その作品の中には長岡市川口(旧 北魚沼郡川口町)を描いたものもあった。板壁と石置き屋根が並ぶ様子は当時の川口におけるごく普通の街並みで、特別変わった建物の姿はそこにはない。ひなびた地方の風景が描かれているだけである。作品発表当時は抽象画の評価が高かった時代であったため、向井の作品は批判を受けた。しかし、後年その堅実で真摯な作品制作への取り組みが認められ、理解されるようになったという。続いて大町助手は、今和次郎と岡鹿之助について言及した。大町助手は、省みられることの少ない建物に魅力を感じ、描き続けた両者を比較研究した。今和次郎は「日本の民家」等を著した民俗学研究者である。日本の日常に根ざした住宅、いわゆる「民家」を文章とイラストレーションで記録した。それまで見向きもされなかった「民家」を題材とし、そこに美しさを見いだしているところが非常に魅力的であると語った。対する岡鹿之助は、灯台や信号台、発電所などを描いた。このような建物は人目に触れたり親しまれたりすることは少ないが、そこに魅力を感じ制作している。生活の場ではない特殊な建物もまた、やはり人々に省みられることがない。岡の述べるところによれば、「自分の画風に堅牢さを持たせるために」古い建物の美しさを援用したという。

続いては堀池助手が自身の創作について語った。堀池助手は、何かを描くときというのは心が動いたときであるという。それは、対象物やモチーフ自体に魅力を感じることもあるが、個人的な思い出とつながっていることが大きいという。例えば出品作品の「サフラン酒造」。2009年のAPMオープン時に初めて訪れた宮内・撰田屋で、恩師・秋山館長の大学卒業制作作品を初めて見た感動が、鏝絵蔵への感動と結びつき、表現したいと思ったという。堀池助手の話を受け、秋山館長はその心の動きを「思い出の美的感覚」と表現した。創作者の心の動きによって作られた作品には、言葉では説明できない真実感が備わっている。それを大切にしたいと語った。

秋山館長は、「人が何も思わないところに何かを発見できる力」を持っているものが創作者であるという。人々が気づかず通り過ぎるようなところに心を動かされ、それを表現し、伝える力を持つものこそ創作者である、と。この「宮内・撰田屋百景シリーズ」でコレクションされた宮内と撰田屋の情景を描いた真実感のあるポスターの数々は、次の世代へと繋がり、また新たな試みへと発展していこうと語った。(森山奈帆/APM職員/APM公式ホームページより抜粋)